

# 萬葉歌シノの新考

室 井 緯

万葉集、卷10の中に次の歌がある。

打摩春去来者、小竹之未丹、尾羽打触而鶯鳴、

上の歌の外に10種のシノを読み込んだ歌が見出される、シノの義を本草学者、山本章夫の万葉古今動植正名から転記すると、

シノは、しなふの義、今シノベダケと云、しのぶだけの義なり、(ぶべ通音) ヤダケに似て質軟、矯むるも、たやすく折れざれば、忍耐の義もて、シノと名くるなるべし。とある、シノ又はシノ即ち小竹、細竹は吾人の生活の中に極く普通に用いる言葉であるが、さて如何なる植物であらう乎、万葉学者はメダケやヤダケに当て、涼しそうにしているし植物学者は一向に黙殺している、即ち如何なる植物学の辞典にも残念乍ら見離されている。日支植物学の古文献の第一人者として誰もが許す、故白井光太郎博士の本草学論攷や樹木和名考其他にも考証を見出すことは出来ないし、現代植物の和漢名の權威であつて如何なる学者の追従も許さぬ牧野富太郎博士の論文中にも見受けられない。たゞ同博士の日本植物図鑑(大正15年版)にはメダケの一名として凶説してある。然し二千六百年記念の先生の名著、牧野日本植物図鑑にはシノと名の附くものは一切見当らず、メダケの解説からも除いてある、従来諸学者によつて種々の異説を唱へはするが誰一人として詳しく考察した人はなく、諸文献を並べただけの消化不良的な考でトンダ間違と混乱とを惹き起す外、何等の役目を持つてゐるとは考えられぬ、かの万葉植物の大著、松田修氏の万葉植物新考なども旧説の中に漂滞している一つで名は新考でも内容は文献の消化ではなく羅列である、故に何回之を読んでメダケなのか、ヤダケなのか、その辺一切が宙に迷うてゐるで盡きるのである。即ち著書としての価値は愚鈍な私の頭では到底判断することは不可能なことである。

上の歌の中によみ込んであるシノは26年前に牧野博士の御考のメダケかと思われるものが、卷7の1236に、

夢年、繼而所見小、竹島之、越磯波之、敷布所念  
があり、上の歌の小竹島をシノジマと詠んで見ると誰が考えてもメダケに外ならないが、ついで見えつつ、たかしまのとし、越磯波之と共に第五句に関して敷布と詠まん為の序詞と考へたい、故に此の歌はシノの句から除いて考察した方が適當と考へる。

なお岩崎常正の大和本經のシノの条下に

メダケ、ナイダケとも云、水辺に生ず葉は長く竹細くして節ひくし、堤に植て土とあつす、根水中にありて朽す(室井云、この一節は実にいゝ加減の文句で如何なる竹で

も水に浸るとすぐに枯れる)壁の小敷とし或は天井に用ゆ、菅笠の骨桃燈のひご家根釘等用ゆ、其外用多し、メダケの細きをシノダケと云、山中に多し、

上の文を讀んで見ると最初は水辺に生ずると説きメダケの利用を力説し乍ら後には山中に多しと述べ、ネリサを説いている、岩崎常正ともあろう佛者も竹については案外、知識が欠けていたものである。

又、貝原益軒の大和本草にもメダケの条下に一名シノダケとしてある。

万葉植物に関する書物にはメダケとするものが多いが、それは考察から導かれたものでは無く、先人の模倣に過ぎない。

小清水先生の万葉植物、写真と解説に、林野や堤防に自生する3米内外の細い綱々しい竹で云々、

とあるがメダケは林野には殆どなく綱々しい竹であると云う感じなど全然起らず、むしろ頑丈と云う感じがする竹である。本種は海辺とか外帯地の河川の堤防を好んで自生するものである。

なおメダケがシノでは無いとの有力なる見方は万葉の時代を沢萬、森本両氏の作者類別、年代別万葉集によつて第一期を壬申の乱まで、第二期を奈良遷都までとし、第三期は天平五年まで、それ以後を第四期とする、即ち地方別に見て、第一期は未詳、第二期は人麿を中心とした作品が多い、彼は讃岐、大和、近江、出雲、吉野、紀伊等を旅したらしく、その優秀作が収録されている、第三期は九州を、第四期は北陸を中心とした作が多い様である。之のシノに関する歌は第二期、即ち和銅3年までの作品が含まれていること。以上のことからして笹の総名では決して無いと思われるし、またメダケでもないことが頷かれる。何故ならば九州辺はメダケの本場であり乍ら、第三期の歌の中には一つも出会わさないからである。同様、北陸を中心とした歌にも見出されないから、決してクマリサや現代植物学者が指している様なアズマササでもあり得ないと信ずる。

然らば万葉集のシノとは何んであるか、私をして言わしむれば、それはネリサそのものである。

即ちネリサ(分類学者の言うネリサ節である)は我国諸州、殊に本州中南部の山地に極く普通に見られ、之は至つて不揃にて小さきは5糶から大きいものでは3米余りにも成長する。前者の例では奈良の春日神社や東京の明治神宮の参道の両脇の堤を見ると芝草と見誤られる程、小形となつてゐる。大きい例では富士山麓、箱根や、六甲山麓から

切出す筆の軸などは之である。各地の平野、山麓を早春俵するとナラやクヌギの冬木立に疎にヌスン伸びたネササの藪に度々出会す。その度毎に藪とは暗い感じのするものであるが、シノの藪は案に相違して明るさがあり、春遠からじの希望に充ちた感を受けるのが常である。それで誰れかの詠んだ「しのゝめのほがらほがらと明け行けば、をのかきぬきぬなるぞ悲しき」と、しのゝめのと、ほがらほがらと掛けたものである。そして時にはマンサク、ハンノキ等が淋しい花を着けているのが見られ、鶯の声も時には聞かれる。こんな山地にあると何時でも前掲の「打藤春夫来者……」の歌が思い出され、眩くのが常である。

上の歌を読み返して見ると、どうしてもメダケではシツタリ合わないからである。仮りに上の歌の小竹をメダケと為て見ると、春とは云え、薄ら寒い初春の海辺に鶯の尾と羽とが打触れて楽しく鳴いている文とはどう考えても当嵌まらぬではないか、メダケと云うものは葉が革質でペロペロし、春丈も一叢、悉く高さが揃い、冬も盛夏の如く青々密生し、鶯の止ることも容易では無く、無論人目には付かない。こんな賑々しい海浜や海に近い河川の堤防では鶯も来て鳴かないし、若し鳴いたとしても誰一人、歌にして見る気持も起らないであろうから、万葉の様な名作を産むことは出来なかつたであろう。メダケ説は以上の事からして少しも実地に即せぬものであることは明らかである。即ち歌のシノは決してメダケを指したものではない。本当に能く植物を知り抜いた学者なら、こんな不都合なことは決してしない筈である。

次に各歌につき簡単に考証して見よう。

巻12の3093に

小竹之上爾、求尻而鳴鳥、目乎安見、人妻妬爾、吾恋二来、

とあるがネササの疎に生え人に踏みにじられた、ネササの小藪を背景として美しい人妻に恋をしたのでは歌も生き奥床しく感ぜられるが、荒波の打つ海浜や海に近い河川の堤防のメダケの丈の高い鬱蒼たる藪の中で人妻と恋を囁くと為て見ると上の歌は死に、折角の美しい人妻も闇に吠いた女としてより感じが出ないではないか。

巻7の1121に

妹等所、我通路、細竹為耐寸我通、際細竹原、

上の歌でも我通路のとあるから屢々人も通り精々人の脛位しか成長しない、ネササの原を通つたものである。メダケは踏まれたりすると直ぐに絶えて了うからネササに外ならぬ。

又同じ1276に

池辺、小槻下、細竹海嶺、其谷、君形見爾、監乍将思、之の歌でも明かにネササである。何となれば槻は海岸等に生えないからである。即ち槻の木陰で情人と腰を下し再び会う機会のないのを悲んだ歌であるから願しい開放的な海

岸や、それに近い河川の堤防の歌とは受けとれない。

佐々木信綱博士の万葉首典には……前畧、広く薄、葉、萩等禾本科の植物で幹直ぐ丈高いものゝ一類の総称に用いられた。

とある、葉や萩は水辺の植物で薄は山地の瘠せた乾燥する禿山の植物であるから少くとも万葉の何れの意にも合はない。

又同じ1349に

如是為而也、尙哉將老、三雪零、大荒木野之、小竹爾、不有九二、

大荒木野は大和の地名である。刈る人もなく冬の野に探えているに譬えた悲哀の籠つた歌であるからネササの葉枯れ荒んだ笹つ原を思い浮べることが出来る、メダケの様に寒さに強く（寧ろ弱いかも知れないが山中では寒がりの竹ご育ぬから）厳冬も鮮緑の姿では到底思い出すことは出来ない歌である。

又同じ1350に

淡海之哉、八幡之竹乎、不造矢而、信有得哉、恋敷思乎、八幡は近江八景の一つである。此処でシノを用いて矢を作るとあるからシノは矢竹であると云う人があるかも知れないが私の研究では矢竹は本州、四国、九州にはもと生えず薩南諸島にのみ天生があつたものを民族の北進と共に矢にするために植えつゝ前進したものであると確信している、だが不可思議なことには現代は原生地にはメダケそのものは無い（之の考証が目的でないから詳細は他日に譲り度い）、それが名古屋の近くの熱田の辺の歌であるからネササでも矢を作つたものか若し矢竹で作つたにせよ、もともと原生しないもの故矢竹に当嵌める訳には行かない。

井岡潤の大和本草、批正に

篠なり、矢に用ゆ、メダケに似て葉甚大なり。

とあるも無論、生命より武器は取く用いられたものであるから、極秘にすべき少量の栽培品を歌に訓む理由はないと思われる。

又小野職博の本草綱目啓蒙にはシノを箭竹に当てゝ記述してあるし、小野蘭山等も大和本草を校訂して、もつともらしくメダケなりと改めてある。

巻11の2478に

秋柏、潤和川辺、細竹日、人不顔面、公無勝、

又同じ2754に

朝柏岡八河辺之、小竹之眼笑、思而宿者、夢所見来、

上二首のシノノメはシノの群と解すべきであるから偲んで我慢しているにかけて疎な即ち成長に大小のある或は春の低いシノにかけて歌は生きる。草丈の3~4米もある背高の鬱蒼とした、メダケの藪では歌は生きない。

又同じ2774に

神南備能、浅小竹原乃、美、妾思公之、声之知家口、

貴公の声が多くの人の中でも際立つて判つきりしてい

る。之の様子をシノの生態に比べたものである。前述の様にシノは小さく時々春高が生えているから、それに喩えたものである。メダケの丈の揃つた生え方をするものでは、その感じは出ない。

又巻13の3327に

百小竹之(モモシノ)……云々、

とあるは多くの篠の生えている野の意であるから、どう見てもネサリでヤダケやメダケのように時に小グループを為す笹では全然歌の意と合致しない。

× × ×

以上の考察はシノを形態、生態、其の他各方面から眺めたものである。幾種もあるサリの中、シノ程、我々祖先が親んだものはなかつたであろう。

それに半可通の者が笹と同視して「叢生せる細竹の称な

り」としているが、それは笹の性質を充分知らないからで、笹からシノを別けたことは意味が無ければならぬ。

シノは簡単に手で折れ真直で分岐が少なく直ぐに箸とかスダレとされる。その代表品は四国からイヨスダレとして優品が出された。イヨスダレも本州、四国、九州に広く分布し、之れでスダレを早速作り、日除けや食料品の容器の蓋として広く引用されていたものである。

又生態方面から見て初夏の美しい緑と大変異つて冬は殆ど葉が枯れて落ち秋から冬の淋しさを一入増すものである。それで能く恋歌の中に引用されている。

かの百人一首の「有馬山ゐなの笹原かぜふけば、いでそよ人を忘れやはする」の歌もイナノササ即ちシノが一層淋しさを感ぜさせるためにシノが用いられたものである。

(76頁より続く)

④ タマシギの雌は他鳥の雄の様に雌同志鬭争する。そして雌が産卵すると雄が抱卵し、雌は見むきもせず他の雄と夫婦になる。本年の観察では一雌が次々と三雄を所有した。後に雌が一人死された雄は四匹の雛をひたすら保育し上げる。これが人間社会にあれば大変だ。

神崎郡 小林平一

⑤ 本欄、佐藤茂樹氏の郷土博物館建設案大賛成。

植物、動物をどなたかやつてくれる熱心家はないものですか?

私は及ばず年々鳥類や昆虫をやります。我が学会の為此の案達成に幹部の方々のご御盡力を切望して止みません。

神崎郡 小林平一

⑥ 今年加路網干区で、コモジロの繁殖を確認しました。この種の確実な卵の標本は現在日本の他になく、山階黒田両博士におりました。私の観察では本種は県下に沢山居ます。

山の中に白サギが沢山居る所(5月~8月)があつたら注意してみてください。

まだまだ各地からみつかるとでしょう。

神崎郡 小林平一

⑦ 生物の撰択生による稲の継続観察の謝礼に学校より貰つた五千円で蜜蜂を飼っている。はじめてから三ヶ月にも足りないがその間の成果は蜂は二群に増加し、蜜三升をとりその内一群は中学校の希望により六千円で分譲し生物室の暗幕を新調した。六月にはじめて暗幕を使つて顕微鏡幻燈をやり一同喜んだ。次に分蜂したら顕微鏡が買いたいと張切つて観察、世話をしている。

あの小さい虫が二万頭一家族となり巣をつくり蜜を集め子を育てて外敵を防いで生活をしてゆく姿は何と言つてもすばらしい。

加古川東高校 豊田喜雄

⑧ 生物の教育と云えばすぐ顕微鏡と答える程、誰も彼

も顕微鏡をみせたがる。肉眼やルーペでの研究が山程ある筈なのに。一層生物屋は顕微鏡を見せるべからずと法律でも決めた方が教育は盛んになるかも知れない。

上郡高原 弘平

⑨ ラセンは軸のまわりを球がころがるものと大きつばに考えてよい。生長方向を進行方向と考え、球が右まわりで進むものを右巻、左まわりを左巻と呼ぶ。同一ラセンでも進行方向により右巻にも左巻にもなるわけ。

広大理動 稲葉明彦

⑩ 昨年加東郡下でもタマシギが繁殖することが確認された。従来我国では富士山(1880) 伊麻沼附近(1899) 佐倉(1899) 桑名(1902) 九州若松(1919) 久留米市外(1928~29) 等が報告され、珍しいものと考えられて来たものであるが、最近本県下の諸所から知られるようになったことは誠によろこばしい。小林桂助氏の御教示によると、淡路三原郷塚村(小林桂助氏、山崎氏) 神崎郡結津村(小林平一氏) 氷上郡谷川(小林桂助氏) 出石町(小林平一氏、フェネルギ氏) 加古郡加古川町(釜江氏) 等があげられ、更に上記の通り加東郡小野町が加えられることとなつた。

加東支部 山本広一

⑪ 大後、鈴木氏著日本生物季節論(北隆館)によると、ツバメの渡来は平均大阪4月6日、神戸4月2日、洲本4月6日となつて居り、本県では大体4月上旬ということになる。しかし先発者の到着するのはもつと早く、鳥獣調査報告第四号(農林省)ではそれよりもつと早いらしい(兵庫県に関する記事はないが)私の住む加東郡南郡地方では従来3月下旬~中程又は後半に現われている。

ところで1948年には3月17日、1949年には3月19日、本年即1950年には3月23日に最初の数羽がやつてきた。これはこの両三年の冬が例年よりも暖かく、春の早く訪れたため、ツバメの渡来期に少なからぬ影響を及ぼしたものと見るべきであろう。

加東支部 山本広一

(100頁へ続く)